

翠

一九六三 a 『雲南省寧蒗彝族自治州永寧納西族社会及其母權的調

查報告』(材料之一)

一九六三 b 『雲南納西族社会歷史調查』(材料之二)

新島

一九六四 『雲南省寧蒗彝族自治州永寧納西族社会及其母權制的調

查報告』(材料之三)

王承權 李近春 啓承緒 劉龍初

一九八〇 『永寧納西族的阿注婚姻和母系家庭』上海人民出版社

王承權 李近春 啓承緒

一九八一 『雲南四川納西族文化習俗幾個專題調查』

王承權 啓承緒

一九八九 『神秘的女性王国』北方婦女兒童出版社

敵汝瀾 宋兆麟

一九八三 『永寧納西族的母系制』雲南人民出版社

雲南省編輯組

一九八六 『永寧納西族社会及母系制調查』雲南人民出版社

四川省編輯組

一九八七 『四川省納西族社会歷史調查』四川省社会科学院出版社

君島久子

一九七八 『納西(麼些)族の伝承とその資料—「人類遷徙記」を中

心として—

『中国大陸古文化研究』八・四一—一六

一九八七 『天女の末裔—創神話にみる始祖伝説の「形態」』『民間

説話の研究』同朋舎 二六四—二八八

一九八九 『天女始祖型洪水説話の周辺』『日本伝説体系』みずうみ

書房 三八六—四〇七

李子賢

一九八三 「論麗江納西族洪水神話的特点及其所反映的婚姻形態」

『思想戦線』一九八三—一期・七九—八六

楊福泉

一九八二 「納西族的古典神話与古代家庭」『思想戦線』一九八二

—四期・七十一—七六

郭大烈 楊世光

一九八五 『東巴文化論集』雲南人民出版社

一九九一 『東巴文化論』雲南人民出版社

中共麗江地委宣伝部

一九八一 『納西族民間故事選』上海文芸出版社

雲南省民族民間文学麗江調查隊

一九六〇 『創世記』雲南人民出版社

季国文

一九九一 『東巴文化与納西哲学』雲南人民出版社

雲南省民間文学集成辦公室

一九八八 『祭天古歌』中国民間文芸出版社

伍雄武

一九九〇 『納西族哲学思想史論集』民族出版社

納西族簡史編写組

一九八四 『納西族簡史』雲南人民出版社

国家民族問題五種叢書編輯委員会中国少数民族編写組

一九八一 『中国少数民族』人民出版社

和志武

一九五六 「人類遷徙記」『民間文学』一九五六—七月—一九—二七

一九八九 『納西族東巴文化』吉林教育出版社

木芹

一九九〇 「論永寧納西族母系家庭与封建社会同体的原因」『思想戦

線』一九九〇—五期・七一—七八

賭けに夢中になり、永寧の土地や人々、家畜を賭けてしまわないよう、その日に干木女神の祭りをを行うようになったのだ。

いずれも、干木女神の大きさを伝える伝承である。

母系制を保持し、阿注婚を行なっている永寧においては、子供は母に帰属する。男は自分の子供に対して教育や扶養の義務はなく、むしろ姉妹の子供に対してそうした義務を持つている。老いればメイ、オイに面倒をみてもらうのである（雲南省編集組 八六・三）。

阿注の関係が安定していれば、「認子」と呼ばれる儀式を行なう、子の実父が誰であるかを近隣の人々に知らせるが、しかし、「認子」を行なった父子であっても、阿注関係が終了すれば父子のきづなも絶たれるのである。子が自分の実父が誰であるかを知っていることは、さほど自慢すべきことではなく、逆に、実父を知らぬことは恥ずべきことではない、というのが永寧の一般論であるという（王 八〇・一九四）。

こうした母を中心とする社会が天女を始祖として位置付け、干木女神を最高神として崇拜する素地となったのであろう。

麗江の伝承と比較を行ないながら、永寧の創世神話を見てきたが、そこには母系制の名残、阿注婚が色濃く反映していた。今後は、納西族以外の民族の伝える。納西族型創世神話について、その分布と、各民族の特徴が伝承の中どのように反映されているか見てゆきたい。

付記

本稿は平成二年度岐阜教育大学特別助成金によるものである。

本稿の執筆にあたり、君島久子教授に多くのご教示をいただいたことを、心から感謝します。

註

(1) 一九五六年の民主改革時、永寧納西族は九五八戸、六一九九人であった。

摩梭の呼称は雲南省永寧、四川省木里、塩源、塩辺等の漢、チベット、イ族が、その地の納西族に対して用いているものであるが、永寧に古くから居住している納西族は、自ら望んで摩梭の呼称を用いているという（王 一九八九・三四）。

(2) 母から難題の出されるもの…中国科学院民族研究所雲南民族調査組 一九六四・一一・君島 一九八九・三九一—三九二。父母が出すもの…王 一九八一・二九〇。父母が出すが、母が最難問を出すもの…王 一九八〇・二二五四。父が出すもの…王 一九八一・二七—二八

(3) 「阿注」とは普米語で友人を意味する言葉である。同性、異性いずれにも使えるが、実際には、妻問婚を行なっている双方が用いている。阿注に該当する納西語は「主若主咪」であるが、長過ぎるためか使われていない。「阿宵」といった語もあるが、これも普米語で、性関係のある男女が内輪で使うもので、人前では使われないという（王 一九八一・八一—八二）。本稿では「阿注」を用いた。

文献

中国科学院民族研究所雲南民族調査組、雲南省民族研究所

供は三つの種族の始祖となり、次男の納西族は永寧土司である木氏の系譜へと連なっている（君島 八七・二六七―二六八）。また、祭天を行なう際、天女と主人公とが共に祭られる（和 一九五六・二七）。

これに対して、永寧の場合、多くの伝承が、天女を民族の始祖として崇め、そのための祭りをおこなっているのである。例えば次の伝承のように。

天上から主人公と共に地上に降った天女は、子孫に様々な技術を教える。作物の育てかた、家畜の飼いかた、火の使いかたなど。また、山刀、鍬、犁といった道具を作りだしている。子孫が無事に暮していかれることを見届けると、天女は天界へ帰って行く。その後、子孫達は天女を納西族の始祖と崇め、毎年十月に盛大な祭りを行なう（王 八一・二九）。

永寧においては天女への感謝の気持がより明確であり、始祖として天女のみが崇められるのも、母系制の名残を留める社会の反映であろう。

天女に対する崇拜とは別に、永寧納西族には干木女神という独特の信仰があり、無限ともいえる尊崇の念を抱いている。

調査報告によれば（王 八〇・三三―三三三）、この女神は、永寧地区の人々の繁栄衰亡、農業の豊作不作、家畜の増減を主管し、あわせて女性の心身の健康、婚姻、出産、子育てをも司るといふ。毎年七月二五日、人々は獅子山に登り、干木女神の祭祀を行なう。正装した人々は女神廟を訪れ、

参拝した後、廟前の広場に集って食事をし、競馬などの行事を楽しむ。青壮年の男女にとっては、この祭りは阿注を採す絶好の機会である。互に意気投合すれば、獅子山で野宿したり、山麓に宿ったりする。

干木女神についてはまた次のような伝承もある（王 八二・二五六―二五七）。

干木女神は、あまたいる山神の長であり、周囲の男の山神はすべてその支配下に置かれていた。彼女も阿注を持っており、四川省塩源に住む山神ワルプラが長期阿注であった。他に、永寧の山神のワハ、ツアチ、アシャなどとも一時的な阿注関係を結んでいる。このため、阿注とのいさかいが絶えない。

ある時、彼女は阿注と喧嘩をした。阿注は麗江へ逃げ去ろうとしたが、逃げて行く途中で彼女に取り押えられ、永寧へつれ戻された。

別のある時、一時阿注のツアチと彼女が共に居るところを、長期阿注のワルプラにみつかつてしまった。ワルプラは怒り、刀を抜いてツアチに切りつけた。永寧盆地の東南に細長く続く丘は、その時切られたツアチの体の一部であるという。

干木女神の祭りに関して、こんな伝承もある（王 八二・二八八）。

七月二五日は年に一度諸神がチベットに集う日であった。この時、神々は賭博を楽しむのが常であった。干木女神は賭博がことのほか好きだったので、人々は女神が

に留って暮し、結婚相手の家に移ったり、新たに家を作って二人で暮すことがない。男性は母の家で夕食を済ませたあと、女性の家を訪れて一夜を共にし、翌朝早く母の家へと帰って行く。こうした結婚生活を送る男女は互いを「阿注^{チヌ}」とよびあっている。註⁽³⁾

男女が生涯に持つ阿注の数は、多い場合は百人を超すが、一般的には七、八人である。阿注関係は、当事者双方が自主的に取り結ぶものであって、第三者が介入するものではない。従って、関係の継続期間も、数日、数カ月、数年、数十年とさまざまである。若い時期は意気投合するものも早い。別れるのも早く、年齢が高くなるに従って安定していく傾向にある。

また、別の報告によれば、阿注間の経済援助は、阿注として過す期間によってかなりの相違点が見られるという。(王 八十一・六六) 短期間で終了する場合は、阿注の存在そのものが家族にも秘密のままであるが、長期にわたる場合、男性と女性の家との間に経済的なつながりが生じる。例えば、男性は毎年衣服一式を女性に贈り、女性の母及び母の兄弟にも塩や茶を贈ることがしきたりとなっている。また、女性の家のために農作業を行ったり、柴刈り、家の修理といった労働も行なう。双方の関係がとりわけ密接な場合、両家の間に「依底^{イテイ}」という組織を作り、農業を共同で行なったり、輸送業を共同経営したりする。そうした状況の反映として難題を見ることが可能であろう。

尚、難題のモチーフは、麗江、永寧ともにあり、内容も

よく似ている。これが麗江から永寧にもたらされたのか、永寧から麗江へ影響を与えたのか、今後の研究に待ちたい。

四 阿注間の葛藤か？

麗江の伝承では、天女は父の決めた結婚を破棄して、洪水後一人生活した男性と共に地上へ降る。このため、婚約者が怒り、暴風雨を起こして二人の行く手を阻もうとする。しかし、天女が香を焚いて天を祭り、婚約者の一家に対する感謝を表わして事なきを得る。

一方、永寧の伝承では、主人公の男性は、難題を解いた後に、もう一つの試練を天女の母または父から課されるのである。

即ち、動物に変身した三姉妹の中から一人を選ばなければならぬ。その結果、主人公が選んだ相手は、主人公を天に伴い、難題を解くのに協力した長女ではなく、三女であった。この部分以降、麗江の伝承にはない。別の話が加わった複合型と見ることもできようが、あえて阿注婚の反映として見ると、主人公が従来阿注から新しい阿注へ心移してしまったと考えることができよう。

王 一九八〇・二六四―二六五には、阿注関係の不安定さや相手の心変りを嘆く歌が多く紹介されている。後で述べる干木女神の伝承にも阿注間の葛藤が見てとれる。

五 始祖としての天女

麗江の伝承では、天女と主人公との間に生れた三人の子

3 種を蒔いて一日で収獲せよ。

4 虎の乳を手に入れよ。

男は仙女の助けを借りて、難題を全て成し遂げる。父は男に、池のほとりで待っていてれば三人の娘が通る、中の一人を選ぶように告げる。その後父は、三人の娘を、長女は虎、次女は豹、三女は蛇に変身させて、男のそばを通らせる。男は虎と豹は恐れるが、蛇は恐くないので捕まえる。こうして男は三女を妻に迎え、ともに地上に降る。

長女は、男を天上に伴い、協力して難題を解いたのに妻に選ばれなかったので腹を立て、男の家庭をこわそうと企む。

長女の企みにより、男は泉の水を飲んで長い眠りにつく。長女はまた雄猿をけしかけ、三女と同居させる。三女と雄猿の間に半人半猿の子供が生れる(二男二女)。

二十年が過ぎ、男は菩薩の援助によって目覚める。家に帰ると、老いた猿が家にいる。男は怒って猿を殺す。子供は殺すに忍びず、命を助けてやる。子供同士結婚し、子孫をのこした。それが納西族であるという(王 八一…二七)。

三 難題にまつわる阿注婚的要素について

三・一

難題に関して、重要なことは、難題を出して天女の夫になろうとする男の力量を試すのは誰かという点である。

麗江の場合、入手できた資料を見る限り、東巴經典に記されたものも、口頭で伝承されているものも、天女の父が難題を出している。ところが、永寧の場合、天女の母が深くかわっているのである。永寧で採集された手元の五話のうち、母が難題を出す例は二話、父母が出す例が二話(そのうち一話は、最も難しい要求を母が出している)、父が出す例一話であった。^{註(2)}

敵 一九八三・六五によれば、瀘沽湖地区の納西族は母系制を保持しており、母系によって血縁をたどり、財産が母を通じて受継がれる。また、男性に対する女性の優越性が認められる。「達布」と呼ばれる家長は、通常年長で信望があり、実務能力のある女性が担当する。達布の主な仕事は、農作業の計画を立て、仕事の分担を決め、一家の財産を管理し、日常生活が順調に営まれるよう手配し、宗教祭祀を主宰することであるという。永寧納西族の伝える創世神話において天女の母が難題を出すのは、こうした社会の反映であろう。

三・二

婚姻前に男性が女性の家のために働く風習は、他民族にもみられる一種の労働婚としても理解できるが、ここでは試みに阿注婚との関わりを側からとらえてみたい。

阿注婚に関する調査報告によれば(雲南省編集組 八六・二一三)、永寧盆地及び瀘沽湖畔、その周辺の丘陵や谷間に住む納西族は、その大多数が、結婚後も各々の母の家

巫師がいるが、文字はない。

本稿では麗江と永寧の納西族の創世神話を比較し、永寧納西族の阿注婚が神話中にどのように反映されているか、見て行くことにしたい。

二 納西族の創世神話

麗江、永寧いずれの納西族も「洪水神話」や「創世記」と呼ばれる創世神話を伝えている。麗江では祭祀を行なう際、経典に書かれた創世神話が巫師によって朗唱される。その内容をまず紹介する。

大昔、天地は混沌として絶えず動揺していた。氣と声の変化によって神が生れ、次々に変化して卵、鶏、神、鬼などが生れた。九人の男神が天を、七人の女神が地を開いた。声と氣が結びつき白露を生み、白露が大海に変ってそこから恨古が生れた。その子の每古から後の七代が人類の祖先で、最後の崇仁麗恩ツォセルウの代に五人の兄弟と六人の姉妹がいた。配偶者がいないので互いに結婚すると、大洪水が起る。ツォセルウ一人皮鼓に入って助かり生残る。

彼は伴侶を求めて旅に出て、黒白の境にある梅の木の下で一人の美女に出会う。彼女は天女で、鶴になって地上に舞い降りたのであった。天女は彼を翼の下にかくして天宮へ帰る。天女の父は彼に難題を出す。

- 1 一日で九つの森林の木を切倒せ。
- 2 切倒した木をすべて焼払って灰にせよ。

3 焼払った土地に一日で種を蒔け。

4 その焼畑の穀物を全て収穫せよ。

5 収穫したものを一日で晒せ。

天女の助けを得て成し遂げる。その後も、崖羊や魚を捕えたり、虎の乳をしぼるといった難題を出されるが、全てやり遂げ、天女と地上に降りる。二人の間に三人の息子が生れ、長子がチベット、次子が納西、末子が民家（白族）の言葉を話し、それぞれの地にかけ去り、始祖となった（和 一九五六・九一―二七）。

では次に、永寧の創世神話の一例を紹介しよう。

昔、空に九つの太陽と九つの月が現れた。昼は暑さで石も溶け、夜は寒さで地が凍った。地上に三人の兄弟がいた。あまりの暑さ寒さに、兄弟は天神に助けを求めた。天神は、洪水がまもなくやってくるから早く逃げるようにと教えた。洪水が起り、三男とキツツキだけが皮袋に入って生き延びる。

一人生残った男は、天神に伴侶をさがして欲しいと頼む。天神は、一月一日に天上から仙女の姉妹が地上に降りてきて水浴びをするから、その中から一人選ぶよう教える。天神の言葉通りにして長女の仙女を捕まえる。仙女は男の伴侶になることを承知し、男をこっそり天上に伴い、自分の部屋にかくまう。

仙女の父が男を見つけ、難題を出す。

- 1 一日で九つの山の木を切倒せ。
- 2 切倒した木を一日で焼け。

永寧納西族の創世神話

——母系制の反映として——

新 島 翠

永寧納西族の創世神話

——做為母系制的反映——

新 島 翠

梗概

納西族人口只有二八万、但有独特的傳統文化。因為居住地區分散、各地納西族在社會情況上、是不同的；在婚姻和家庭方面、更有着顯著的差異。聚住在麗江地區的納西族有用象形文字書寫的數萬卷經典、傳承所謂『洪水神話』。聚住在寧蒗縣永寧一帶的納西族、到一九五六年還比較完整地保存着阿注婚、以及由此構成的母系家庭。他們也傳說『洪水神話』。本文對麗江納西族和永寧納西族傳承的創世神話以及納西族的家庭進行了較為深入的探討。

一九九二年九月二十四日

鍵 語 創世神話 阿注婚 母系制

一 はじめに

中国雲南省の西北山地には阿注婚とよばれる妻問婚を保

持し続けてきた人々がいる。納西族というチベット・ビルマ語系の民族である。

納西族は金沙江と瀾滄江の上流に居住し、人口は約二八万人（一九九〇年統計）。雲南省の麗江に最も多くが居住し、以下中甸、寧蒗、維西と続く。麗江、中甸、維西などに居住する納西族は「納西」と自称し、寧蒗及び四川の納西族は「納」「納日」「納汝」「納恒」と自称している。漢族からは「麼些」「摩梭」などと呼ばれてきた（中国少数民族編写組 八一・三八〇）。現代中国では一括して納西族と呼ばれる民族であるが、さらに細分化すれば、永寧一帯に居住する人々は「摩梭」と呼ばれている。註(1)

永寧地域は一九五六年の民主改革時まで、阿氏の世襲による土司制度の下にあり、「司沛」と呼ばれる貴族、「責卡」という農民、「俄」という奴隷の三つの階級が存在した（王八〇・一一二―一五）。

伝説によれば、納西族の祖先は北方より遷徙移動し、最も早く永寧地区に入ったのは六つの母系氏族（納西語で「尔」と称す）であったという。「尔」は後に分化して、より小さな母系集団「期日」へと変化した（敵 八三・三一―三五）。一つの期日には数家族から十数家族が加わり、斯日単位で労働や祭祀が行なわれる（王 八〇・一一二―一五）。

言語はチベット・ビルマ語系言語支に属すが、麗江納西族は東巴文字と呼ばれる象形文字を持っており、東巴という巫師によって伝承されている。永寧には達巴と呼ばれる